



お父さん譲りのチャレンジ精神で取り組んでいます。「手間がかからないと聞いていたオリーブ栽培、実際にやってみると相手は生き物なので、手間をかければ答えてくれるし、手間をかけなければそれなりにしかならないと

実感しています。草刈りも大変ですし、圃場のメンテナンスにも手をかけてやります。ただ、すぐに結果が出るものではないので、のんびり構えて、焦らずゆっくりを心がけています。」ここ数年は、1本1本の樹を毎年写真に撮って見比べるという平井さん。「10年先に役に立てばと思っています。」異業種への挑戦と言えば、平井興産は平成20年からすっぽん養殖にも取り組んでいます。このすっぽん養殖にもオリーブが使われています。「オリーブの葉を乾燥し粉末にしてえさに混ぜます。どんな効果があるのか、科学的に調べてはいませんが、地域の特産品とコラボしたい思いで使っています。」自社での商品化も視野に入れ、「現在は実を出荷するだけですが、自社でも搾油するか、お茶やせっけんなどの商品を作るか、どの方向性に向かうかはこれから考えていきたいです。個人的には『美』に興味があり、化粧品も良いと思っています。」視察で訪れた他社を参考に、畑に牡蠣殻を撒くなどさまざまなことにも挑戦しています。「先人に学び、新しいことにもチャレンジしつつ、オリーブを盛り上げていきたいです。」まさに日々挑戦！穏やかな人柄の中にも静かな闘志をのぞかせます。



平井興産(株)  
平井徹さん  
(大柿町深江)



浦上美由紀さん  
(沖美町岡大王)

沖美町でオリーブを育てる浦上美由紀さん。サイクリストの目にも留まりやすい海岸沿いの通りに面したオリーブ畑は、いつ訪れても、手が行き届いた“模範”とも言える畑。草刈りや剪定など、オリーブへの愛情がたっぷりと注がれています。「皆さんからよく見える場所で、作業中に声も掛けてもらうので、きれいにしておかないとね。」加えて「農業自体が初めてだから、何をやっても不安で、枯れさせないためにも、この先ずっと木を育てていくためにも、とにかく、きちんと手入れしておきたい。」と言います。「元々、大きな木が茂っていた雑種地で、海のそばにあるのに、景観が良くなく、ゴミの投げ捨てられていて…」景観を良くしたいとの思いから、潮風にも強く、手がかからないと聞き、平成24年度に苗木を購入し、オリーブ栽

培に挑戦することになりました。「同じ畑なのに、樹によって実の付き具合が違ったり、できるだけ無農薬で育てようと竹酢液を試してみたり、まだまだ手探り状態。マニュアルがあればいいのだけど。」との苦労話も。逆に育てる楽しみは、農作業中に地域の方と交流ができるほか、「去年はじめて搾った自家用オイルは、とてもおいしくて、サラダやみそ汁、納豆など何にでもかけて食べました。友人にもたくさんプレゼントし、おいしいと言ってもらえたこともうれしくて。またプレゼントできるのを楽しみにしています。喜んでもらえるのがいいですね。」とにっこり。夢は？と聞くと「とにかく育



てて、たくさん実が取れるようになればうれしい。畑のそばに、休憩できるログハウスのような小屋を作って、皆さんに遊びに来てもらえるようにしたいですね。」さらに、調理師の資格をお持ちの浦上さんには大きな夢がありました。「島の特産の柑橘と組み合わせたドレッシングなどの商品開発もしたいと思っています。」いつか浦上さんのドレッシングが食卓に登場する日がやってきそうです。

## 温故知新×チャレンジ精神

### オリーブ畑を自然体験の場に

熊本県出身の中川さんは、4年間江田島で第一術科学校に通った後、海上自衛隊呉地方隊へ。5年間の勤務を経て、海上自衛隊を退職し、広島大学経済学部へ入学するという異色の経歴の持ち主です。大学卒業後は、東京の不動産会社へ就職したのち、独立。江田島町に江田島共済不動産(株)を設立しました。江田島の地を選んだのは、「術科学校に通っていた頃にあったら便利だと思うものを提供したい」

との思いから。現在開業3年目、地域に住み、近所付き合いも大切にしながら、生徒への下宿や物件の紹介を中心に経営しています。今年、オリーブの栽培を始めたのは、農地を譲り受けたのがきっかけです。農地と言っても、大きな木がたくさん生えた森のような状態。これ以上、手が付けられなくなる前に何とかしなければと、市をあげて取り組んでいるオリーブ栽培に着目しました。「木を切ったり、草を刈って、農地として開墾する作業は、思った以上にしんどいですが、初めての経験ばかりで楽しいし、周りの人にもきれいになって良かったと声を掛けてもらえるのがうれしい。」まだ穴を掘

り、植えているところで、友人たちに手伝いに来てもらうこともしばしば。「一人で作業すると、つい休憩が長くなりがちなので、誰かと一緒にする方がいいですね。」と作業の秘訣を教えてくださいました。「何とか植えられる段階に来たのでほっと一安心。4月中に40本植えることがひとまずの目標です。」夢を聞くと、「実を出荷するところからはじめて、10年後には自分で加工、販売するところまでいけたらいいですね。」と将来も見据えています。さらに「まずは、畑の横にバーベキュー場を作って、自然を楽しめる場所を作りたい。自衛隊や地元の皆さん、島外の人が触れ合える、農作業体験の場になればいいですね。」と、本業の不動産業にリンクさせた新しいオリーブ産業の形が芽生えそうな予感がします。

## 特集



生産者さんに聞きました

中川敬大さん  
(江田島町津久茂)



能美運輸(株)  
山本修さん  
(能美町鹿川)



新規栽培者さんいらっしゃい!

## 畑の手入れは景観を良くするため

### 島外の人に来てもらうきっかけに

能美運輸(株)は創業64年。一口に物流と言っても、時代とともに変化する需要に柔軟に対応しながら、地域の企業として愛されています。社長の修さんは、平成12年に大阪からUターンし、家業を継ぎました。近年は、5年後、10年後を見据えての事業展開として、物流以外の業務も手掛けています。新しく始めた事業に高齢者の安否を見守る「みまもり横丁」と「オリーブ事業」があります。今年の苗木販売で50本を購入し、耕作放棄地を耕した3.6aに22本を植えました。「しばらく荒れていた畑を耕すのは一苦労でした。」木の根があり、予想以上に重労働だったと言います。当面の目標、100本の植樹に向けて、畑を広げていくよう計画。「開墾したばかりの畑は、梅雨時期に水はけを確認したり、樹の様子を観察しながら、オリーブに

適した畑に作り上げていきたいです。」と研究にも余念がありません。なぜオリーブ事業を始めたのかを尋ねると「正直、収益と収穫時の人手を考えるとあまり魅力を感じていませんでした。それでも栽培しようと思ったのは、島外から人を呼び込めると感じたから。オーナー制や企業などの農業研修、イベントを仕掛け、江田島市以外の人に島に来てもらうきっかけをつくるのが夢です。」企業で取り組むオリーブ栽培。能美運輸の企業コンセプトである「安全安心」に沿うように「無農薬有機栽培に挑戦します!」と力強い言葉も。「長寿の樹を次の世代につないでいくためにも、個人ではなく、企業

として取り組みたかったんです。オリーブを栽培する人や収穫量が増えることで、飲食店が増え、飲食店に卸すための野菜を作る人が増えるという好循環が江田島市で生まれれば、最高ですね。」と新たなチャレンジに目を細めます。ブログなどで積極的に情報発信する山本さん。好循環の中心となり、江田島のオリーブ産業をけん引してくれるかもしれません。

